

水曜礼拝ダイジェスト

「三位一体の神」

ハイデルベルク信仰問答 第8主日

関口 康

三位一体の教理は、たしかに難しいものです。しかし、これを正しく理解することができれば、キリスト教信仰の重要なポイントを、鮮やかに把握することができるでしょう。

1. 使徒信条における三つの分類

使徒信条は以下の三つの項目に分類されます。

第一は父なる神とわたしたちの創造について（第一項）。

第二は子なる神とわたしたちの贖いについて（第二項）。

第三は聖霊なる神とわたしたちの聖化について（第三項）。

2. 二種類の三位一体（内在的三位一体と経綸的三位一体）

使徒信条が教える三位一体の教理は大別して以下の二種類に区別されます。

（1）内在的三位一体（父・子・聖霊の区別）

わたしたちの神は、父・子・聖霊という三つの「位格」（いかく）を持っておられます。この

三位一体の理解を、教会の伝統は「神の内なるみわざ」とか「内在的三位一体」と呼んできました。なぜ「内在的」かといえ、父・子・聖霊という三つの「位格」は、ひとりの神存在の内部における区別だからです。こうして、内在的三位一体とは、言うならば、《永遠の次元》における神存在内部の区別であると言えます。

（2）経綸的三位一体（創造主・贖罪主・聖化と完成の主の区別）

これに対し、もう一つの三位一体理解があります。創造主なる神・贖罪主なる神・聖化と完成の主なる神という三つの「経綸」（けいりん）で区別される神という理解です。これを教会の伝統は、「神の外なるみわざ」とか「経綸的三位一体」と呼んできました。

「経綸」とは、英語のエコノミー（経済）の日本語訳です。広辞苑で調べると「国家を治めととのえること。治国済民の方策」などと説明されています。これはもちろん、ごく一般的な説明です。われわれが用いる場合は、いずれにしても、「神の経綸」に他なりません。主なる神が神御自身の御国（支配領域）としての“この世界”を治めととのえることです。ですから、それは「神の計画」とか「神の定め」というほどの意味です。

「創造」とは、世界と人類との歴史の初めに起こった、過去の出来事のことです。

「贖い」とは、創造後に罪を犯して墮落した世界と人類を救うために、父なる神が、御自身

の御子イエス・キリストを通して、聖霊の働きにおいて、この地上で行ってくださった、救いのみわざのことで。

「聖化」とは、イエス・キリストの昇天後、いわばキリストの代わりに地上に遣わされて、ひとの心の中に注がれて、宿ってくださる聖霊なる神のみわざを通して、「イエス・キリストは主である」と信じて告白する人々に与えられる神の恵みです。

そして「完成」とは、世界と人類との歴史の終末に起こるであろう、将来の出来事です。

このようにして、創造・贖い・聖化と完成は、歴史の初めに開始し、歴史の終末に終了する、地上における神のみわざにおける区別である、と説明することができます。経綸的三位一体とは、《時間の次元》における神の存在のあり方のことです。

3. 三位一体の教理における諸原則

(1) 二つの大原則

・「神の内なるみわざ（内在的三位一体）は区別される」:

父は子でも聖霊でもなく、子は父でも聖霊でもなく、聖霊は父でも子でもありません。

・「神の外なるみわざ（経綸的三位一体）は区別できない」:

父なる神だけが創造のみわざをなし、子なる神だけが贖いのみわざをなし、聖霊なる神だけが聖化のみわざをなすのではありません。父・

子・聖霊が創造をなし、父・子・聖霊が贖いをなし、父・子・聖霊が聖化をなすのです。

(2) 歴史的存在はすべて神の恩恵である

わたしたちの神は、完全なご存在であり、父・子・聖霊の交わりは完璧なのですから、神以外の何ものをも「必要」とされません。しかし、神は、そのようなお方であるにもかかわらず、あえて世界と人類を創造され、御自身が造られたその世界と人類を心から愛されました。それゆえ、すべての被造物は、「神の恩恵」であり、「神のぜいたく」でさえあります。こうして、主なる神は、永遠の愛に満ちた御家庭（内在的三位一体）の内に「引きこもる」ことを欲せず、「内」から“外”へと向かわれたのです。

(3) 創造者と被造物の区別

神の被造物としての全世界と全人類は、神の素晴らしい作品であるが、被造物そのものは神の“外”にあります。地上にあるいかなる存在も、もちろん人間も、神ではありません。ここに、わたしたちがなすべき、偶像礼拝との徹底的な闘いの根拠があります。

世界も人類も「神の被造物」です。この視点から、地上の存在は徹底的に非神化・非偶像化・非迷信化・非神話化されなければなりません。

しかし、神は何の目的もなしに世界と人間を創造されたわけではありません。世界と人間を楽しんでくださるために、創造されたのです。

(2004年6月23日、水曜礼拝)